

さとうきびの規模拡大をめざして

え はた まき ゆき
江 畑 正 之

立秋を過ぎ9月ともなると秋の季節が訪れるのであるが、本年は依然として蒸し暑い日が続いている。梅雨から引き続き太平洋高気圧の北への張り出しによってその周辺部に位置する南九州は、熱帯低気圧や豆台風の再三の接近で夏らしい快晴に恵まれず、ここ鹿児島は8月の晴天は2日間だったと報道されている。

野菜類は湿害や病害で品薄となり、早期水稲（7月末～8月上旬に収穫）は登熟不良や一部穂発芽が発生し、コンバインでの収穫さえままならぬ日が続いた。異常気象とは言え農業ほど気象の影響を受ける産業があるだろうかと天気の回復を祈りたくなる。

農業は食糧の安定供給面や多面的機能をもち環境保全上重要な産業として位置づけられているが、気象異変殊に日照不足は、同化産物の貯蔵・蓄積を機能的宿命とする作物そのものの生産が危ぶまれる。

私の関係しているさとうきびも日照不足で生育は遅れぎみで思わしくない。さとうきびこそC4植物として、もっとも同化効率がよく乾物生産の多い作物とされ、太陽の光を受け空気中の二酸化炭素を利用して多くの同化産物を生産貯蔵する一方、酸素の供給源としての効用が高く評価されている。対策はないものだろうか。

さとうきびは鹿児島南西諸島及び沖縄県の基幹作物として地域経済に重要な役割を預かっている。近年生産農家の高齢化や他作物への転換などで面積・生産量ともに減少しつつあるが、今後いかに対策をたてるかについては前に紹介した。（『農総研季報』第39号）

その中で規模拡大のための土地集積と担い手の育成、機械化一貫体系による省力化などについて述べた。今回現地で規模拡大と機械

省力化を推進し高生産をあげ、生産振興に貢献し、鹿児島さとうきび生産改善共励会で最優秀賞を受賞した農家を紹介したい。

鹿児島県南種子町（種子島）の河脇秀二郎さん（54歳）は平成9年度に1,206トン（10a当たり収量8.5トン）を収穫出荷し、生産額は2,400万円を超え、鹿児島県内で初めて1,000トンを超える農家が誕生した。引き続き平成10年度も1,497トン（10a当たり収量837トン）を出荷している。

河脇さんは昭和57年Uターンし、たばこ・甘しょを中心とした経営から昭和59年に初めてさとうきび10aを栽培し、順次さとうきび作りに転換して面積の拡大を図り、平成3年度には5haのさとうきびを栽培するまでになった。その後年々土地の購入と借地により面積を拡大して平成9年度には自作地7.00ha、借地7.55ha、計14.55hのさとうきびを収穫出荷するまでに至った。なお、平成10年度は18haを収穫し単一農家では画期的経営である。この間農業委員会などによる土地の斡旋を積極的に受け、近年は農地流動化制度を活用し土地の集積に余念がない。

このほかに町から3haの採苗圃の栽培委託を受け、農家に無病苗の配布を行っている。夏植新値を含めると約25haにさとうきびを栽培している大規模農家である。

夫婦二人で経営し、運転手1名を常雇、収穫時期を中心に臨時9名（婦人）を雇用し、主としてハーベスタ収穫前の梢頭部カット、採苗作業等を実施している。平成11年になって息子夫婦がUターン帰農した。

省力化のためトラクタ、ライムソワー、マニアスプレッダ、動力防除機、耕運機、トラック等の導入は勿論のこと、最も多労な収穫作業の省力化のため昭和61年にチョッピング脱葉搬出機を購入、平成元年にはミニドラムに換え、平成6年度から小型ハーベスタを農協からリースして積極的に機械化省力化に努め、製糖工場に計画的出荷も実施している。

また平成9年10名でさとうきび生産組合を結成し、高齢農家や兼業農家のさとうきび収穫8haを受託し、地域のリーダーとして信頼されている。

一方、品質や単収の向上にも努力し、培土・除草・施肥など適期管理は勿論のこと、製糖工場のバガスの分譲を受け、畜産農家と契約し、敷料として使用したのちに堆肥化して地力培養のため耕地に多量に還元している。

本人はさとうきびは買い上げ価格が安定し、共済制度も確立し農家の努力次第で安心して生産向上が可能な作物だと自負している。計画性に優れ、行動力、実践力、そして実績、

やれば出来るものと感銘を受ける。この内容は農畜産振興事業団がビデオで紹介していることを付記する。

近年3ha以下のさとうきび作農家比率は減少しつつある反面、5ha以上の農家比率は年々増加して規模拡大が進みつつあり、10ha以上の農家も各地に出現しているが農家数としてはまだ僅かである。今後も中核農家や生産集団の育成が急速に進み、受託作業等もより推進され、さらなるさとうきび経営の発展を期待したい。

(鹿児島県鹿児島市・

さとうきび試験研究協会)